編　修　趣　意　書
（教育基本法との対照表）

※受理番号	学　校	教　科	種　目	学　年
28-67	高等学校	公民科	倫　理	

※発行者の番号・略号	※教科書の記号・番号	※教　科　書　名
35 / 清水	倫理 313	高等学校　現代倫理　新訂版

1 編修の基本方針

本書は，高等学校学習指導要領（第１章「総則」，第２章第３節「公民」第２「倫理」）の趣旨にもとづき，教育基本法や学校教育法等の規定をふまえ，社会における「公民」として必要な倫理観や教養を涵養することを目標に，高等学校公民科「倫理」教科書として編修したものである。編修に際しては，「公民科」「地理歴史科」各科目の学習内容との関連についても考慮している。

▶本書は，教育基本法第２条に示された教育の目標を達成するため，以下の基本方針に基づき編修している。

① 教育基本法第２条第１号に関して

▶全編を通し，「公民」として生きていくうえで糧となる知識・教養が身につくよう配慮して記述した。真理を追究してきた先人たちの軌跡を辿ることで，真理を求めるとはどういうことかを考察できるよう，意を用いている。

② 同第２号に関して

▶青年期の学習において，自己の生き方と労働とのかかわりについて考察するとともに，また創造性を発揮して活動することの大切さを記述している。

③ 同第３号に関して

▶青年期の学習において，自己の形成においては他者との関係が重要であることを記述している。
また，日本や西洋における女性解放の歴史，家庭や職場における男女共同参画について触れるとともに，全編を通して個人と社会の関係やよりよい社会のあり方について考察している。

④ 同第４号に関して

▶生命と倫理の問題について，深く思考し行動した先人を挙げている。また，生命科学や地球環境の問

題を，現代の重要な課題としてとりあげている。

⑤ 同第５号に関して

▶日本の風土や文化をとりあげるなかで，伝統や文化が育まれてきた過程について触れている。
また，異なる文化や宗教・習慣をどのように受けとめて対応していくか，平和構築のためにどのようなことが必要かを考えさせる課題を随所に設けている。

2 対照表

図書の構成・内容		特に意を用いた点や特色	該当箇所
プロローグ		本書の導入として「人間とは何か，生きるとはどういうことだろうか」という問いを掲げ，その問いに対する答えを見出していく過程を通して，真理を求める態度を養おうとしている（第１号）。	４～６ページ
第１編		現代に生きる自己の課題	
		青年の生き方と日本の社会の記述を通して，青年の自己実現と労働とのかかわりについて考察し，職業と生活との関連を重視するとともに，勤労を重んずる態度を培うよう配慮している（第２号）。	16 ～ 19 ページ
		他者とのさまざまな「関係性」に着目する記述を通して，地域や社会とかかわりながら，そのつながりの中で社会の発展に寄与する態度を養うよう意図している（第３号）。	12 ～ 13 ページ 18 ～ 19 ページ
第２編		人間の生き方と社会のあり方	
第1章	第１節	命をかけて知恵を愛し続けたソクラテスをはじめとする先人たちの思索と生涯の記述を通して，幅広い知識と教養を身につけ，真理を求める態度を養うように配慮している（第１号）。	第１節全体 26 ページ
	第２節	ユダヤ教・キリスト教・イスラームについての記述を通して，一神教についての知識を身につけ，理解を深めるとともに，福音書に記されているイエスの言動などから，民族の差異をこえる普遍的な人間愛について思いを至らせることができるよう意を用いている（第１号）。	第２節全体 38 ～ 40 ページ
	第３節	人生における苦悩や死と向き合い，欲望から心身を解き放ち魂の平安を求めた仏陀の教えと生涯の記述を通し，心を惑わせることなく真理を求めることの重要性について理解を深めるよう配慮している（第１号）。	第３節全体 52 ～ 55 ページ

図書の構成・内容		特に意を用いた点や特色	該当箇所
第1章	第４節	社会秩序を構築し人々を幸福に生活させるために指導者はどうあるべきか，人の生き方とは本来どうあるべきか，論争の中で深められた儒家や道家の思想を通して，社会の構成員としての自己の意識を喚起するとともに，社会の発展に寄与する態度を養うように配慮している（第３号）。	第４節全体 58 ～ 59 ページ
第2章	第１節	日本の自然と風土をとりあげる中で，古代日本人の自然観や宗教観，倫理観について触れ，日本において伝統と文化がいかに形成されてきたか，理解を深めるように配慮している（第５号）。	71 ～ 74 ページ
	第２節	インドで誕生し中国で展開された仏教思想が，日本において独自の仏教として発展していく過程を記述し，広く知識と教養を身につけるとともに，外来の思想を受容しつつ独自の思想・文化を形成していく日本の風土についても思いを巡らせることができるよう意を用いている（第１号・第５号）。	第２節全体 85 ～ 86 ページ
	第３節	徳川幕府の支配体制のもと，為政者としての武士の道徳となった朱子学，中国の古典を重視した古学，日本的な心性や道徳を主張した国学，町人のあるべき道徳を説いた石門心学などの記述を通し，近世において展開された徳についての理解を深め，広く知識・教養を身につけることができるよう配慮している（第１号）。	第３節全体 87 ～ 94 ページ
	第４節	江戸末期から明治にかけて，西洋文化を受け容れ近代国家としての日本の基礎を築くため力を尽くした人々とその思想について記述し，広く知識と教養を身につけることができるよう意を用いている（第１号）。	第４節全体
	第５節	明治以降，西洋的価値観と伝統的価値観のあいだで模索した人々や，社会問題の解決を求めた人々について記述し，近代日本の形成の過程で展開された様々な思想について理解を深めることができるよう配慮している（第１号）。	第５節全体
	第６節	戦争の時代とその後の日本の記述において，個人の尊厳や民主主義における個の主体性を問い返そうとする思想を通して，正義と責任を自覚し，主体的に社会の形成に参画してその発展に寄与する態度を養うよう配慮している（第３号）。	113 ページ
第3章	第１節	ヨーロッパにおけるルネサンス・宗教改革・モラリストの記述において，それまで神の創造した世界の中でその秩序のもとに生きていた人間が，自由な活動によって個性を表現し，自らの意思や考え方で世界に向かおうとする姿を通して，人間のもつ創造性に目を向けさせ，自主及び自立の精神を自覚するように配慮している（第２号）。	114 ～ 116 ページ 118 ～ 119 ページ

図書の構成・内容		特に意を用いた点や特色	該当箇所
第3章	第２節	近代科学の成立と方法についての記述を通して，科学技術の発達をもたらした科学的な思考や近代的な知のあり方についての理解を深めさせるとともに，科学技術の発達によって新たな倫理的課題が生じていることにも触れ，近代的な知について再考を促すなど，生命や自然の大切さに思いを至らせるよう配慮している（第１号・第４号）。	第２節全体 127 ～ 128 ページ
	第３節	自由な個人としての人間が自ら行う契約によって国家と社会を根拠づけるという社会契約説の記述を通して，人権思想の形成について理解を深めるとともに，自らもまた社会を形成する個人であると意識させ, 主体的に社会の発展に寄与する態度を養おうとしている (第３号)。	第３節全体 129 ～ 133 ページ
	第４節	科学の発展が技術革新と結びつき，資本主義的経済が拡大していく近代ヨーロッパ社会において，人間の認識能力や道徳の問題，精神のはたらき，人間性の回復，社会とのかかわりなどについて思索を重ねた人々の記述を通して，真理を求める態度を培い，広い知識と教養を身につけることができるよう配慮している（第１号）。	第４節全体 137 ～ 139 ページ
	第５節	歴史とともに哲学の中心的テーマも変化していく中で，言語･欲望･権力というテーマを軸として現代の思想をとりあげる一方，複数の他者との間の公共性，女性の解放，富の再分配による公正の実現などについて思索を重ねた思想家も紹介し，公共の精神に基づいて，社会における正義と責任，男女の平等，自他の尊重を重んずる態度を培うよう意を用いている（第３号）。	第５節全体 161 ～ 166 ページ
第３編		**現代の諸課題と倫理**	
課題学習１		「科学は生命にどこまでかかわるか」というテーマのもとで，バイオの時代と生命倫理，人体の資源化・商品化，再生医療の可能性と課題などについて記述し，生命倫理が現代の重要な課題であることを理解するとともに，生命を尊ぶ態度を養うよう配慮している（第４号）。	172 ～ 177 ページ
課題学習２		「地球の環境の危機と人間の生活」というテーマのもと，かけがえのない地球生態系や環境危機に対する取り組み，環境の保全と再生などについて取り上げ，自然を大切にして環境の保全に寄与する態度を養うよう意を用いている（第４号）。	178 ～ 183 ページ
課題学習３		「情報・メディアといかにつきあうか」というテーマのもと，マスメディアをめぐる問題やインターネットをめぐる問題についての考察を通し，よりよい社会の形成に主体的に参画していく姿勢を培おうとしている（第３号）。	184 ～ 187 ページ

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
課題学習４	「経済はどうあるべきか」というテーマに即して，企業の社会的責任と市民の動き，望ましい経済のあり方などを取り上げ，経済活動と倫理について考察する中で，正義と責任を重んじ，社会の発展に主体的に寄与する態度を養うよう配慮している（第３号）。	188 ～ 191 ページ
課題学習５	「家族と地域社会における人々の結びつき」というテーマのもと，現代の家族や地域社会が抱える問題についての考察を通して，男女がたがいに尊重し合い，主体的によりよい社会を形成しようとする意識を喚起するように配慮している（第３号）。	192 ～ 195 ページ
課題学習６	「異なる文化とともに生きるには」というテーマに即し，現代社会における文明の衝突，自民族中心主義と文化相対主義などの記述を通して，異なる文化をもつ人々との共生が不可欠であることへの理解を深めるとともに，他国を尊重し国際社会の平和と発展に寄与する態度を養おうとしている（第５号）。	196 ～ 199 ページ
課題学習７	「世界の平和と幸福の実現をめざして」というテーマのもと，人類の福祉の向上のために何ができるか，考察していく中で，国際社会の平和と発展に寄与する態度を培おうとしている（第５号）	200 ～ 203 ページ

3 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

▶記述するにあたっては，内容の充実をはかりつつ，高校生の発達段階を鑑み，簡潔・平易であるよう配慮した。

▶本文の理解を促す写真・図版・原典からの資料などを，必要に応じ各所に配した。

▶前見返し・後見返しには年表を置き，思想家や思想を歴史の流れとともに把握できるよう配慮した。

▶随所に特集ページ（Close up）を設け，学習への興味を喚起するとともに，学習を深めてゆくよう配慮している。

編　修　趣　意　書

（学習指導要領との対照表，配当授業時数表）

※受理番号	学　校	教　科	種　目	学　年
28-67	高等学校	公民科	倫　理	

※発行者の番号・略号	※教科書の記号・番号	※教　科　書　名
35 清水	倫理 313	高等学校　現代倫理　新訂版

1 編修上特に意を用いた点や特色

① 青年期の様相を多角的に提示 ●●●●●

▶生徒が生き方について悩んだり決定を迫られたりすることの多い青年期にあることをふまえ，自己を客観的に見つめ，自己の形成における他者や社会との関係について考察できるよう，現代の心理学・社会学などの観点もふまえて，青年期の様相を多角的に示すことをめざした。

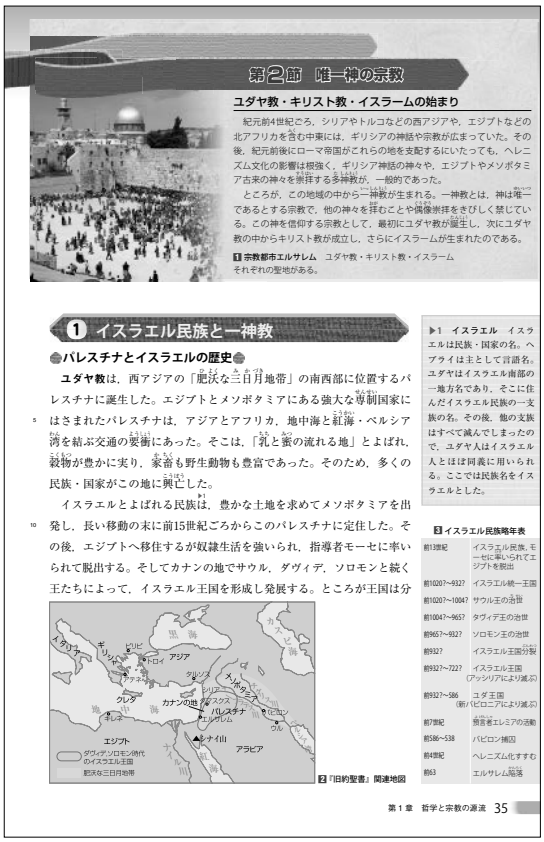
② 先人の思想を紹介・解説 ●●●●●●●●

▶真・善・美などの価値を追究し現代にいたる社会の形成に大きく影響をおよぼした先人たちとその思想について，背景となる時代・社会状況とともに紹介・解説し，生徒が自らこのような根源的な価値を追究するうえでの基礎的な知識・教養を培うことをめざした。

③ 思想を現代社会に結びつける視点 ●●●

▶先人たちが社会のあり方についてどのようにとらえ，課題を見出し克服しようとしたか，その思想や行動を紹介・解説することにより，生徒自らが自己の生きる現代社会について考察し，現代社会を形成していく一員であるという態度を培うことができるように配慮して記述した。

▲ p.5　哲学の学校
（13 ～ 14 世紀，コンスタンティノーブル）



第2節　唯一神の宗教

ユダヤ教・キリスト教・イスラームの始まり

紀元前4世紀ごろ，シリアやトルコなどの西アジアや，エジプトなどの北アフリカを含む中東には，ギリシアの神話や宗教が広まっていた。その後，紀元前後にローマ帝国がこれらの地を支配するにいたっても，ヘレニズム文化の影響は根強く，ギリシア神話の神々や，エジプトやメソポタミア古来の神々を崇拝する多神教が，一般的であった。

ところが，この地域の中から一神教が生まれる。一神教とは，神は唯一であるとする宗教で，他の神々を拝むことや偶像崇拝をきびしく禁じている。この神を信仰する宗教として，最初にユダヤ教が誕生し，次にユダヤ教の中からキリスト教が成立し，さらにイスラームが生まれたのである。

1 宗教都市エルサレム　ユダヤ教・キリスト教・イスラームそれぞれの聖地がある。

1 イスラエル民族と一神教

パレスチナとイスラエルの歴史

ユダヤ教は，西アジアの「肥沃な三日月地帯」の南西部に位置するパレスチナに誕生した。エジプトとメソポタミアにある強大な専制国家にはさまれたパレスチナは，アジアとアフリカ，地中海と紅海・ペルシア湾を結ぶ交通の要衝にあった。そこは，「乳と蜜の流れる地」とよばれ，穀物が豊かに実り，家畜も野生動物も豊富であった。そのため，多くの民族・国家がこの地に興亡した。

イスラエルとよばれる民族は，豊かな土地を求めてメソポタミアを出発し，長い移動の末に前15世紀ごろからこのパレスチナに定住した。その後，エジプトへ移住するが奴隷生活を強いられ，指導者モーセに率いられて脱出する。そしてカナンの地でサウル，ダヴィデ，ソロモンと続く王たちによって，イスラエル王国を形成し発展する。ところが王国は分

▶1 イスラエル　イスラエルは民族・国家の名。ヘブライは主として言語名。ユダヤはイスラエル南部の一地方名であり，そこに住んだイスラエル民族の一支族の名。その後，他の支族はすべて滅んでしまったので，ユダヤ人はイスラエル人とほぼ同義に用いられる。ここでは民族名をイスラエルとした。

3 イスラエル民族略年表

前13世紀	イスラエル民族，モーセに率いられてエジプトを脱出
前1020?～922?	イスラエル統一王国
前1020?～1004?	サウル王の治世
前1004?～965?	ダヴィデ王の治世
前965?～922?	ソロモン王の治世
前922?	イスラエル王国分裂
前922?～722?	イスラエル王国（アッシリアにより滅ぼされる）
前922?～586（新バビロニア）	ユダ王国
前7世紀	預言者エレミアの活動
前586～538	バビロン捕囚
前4世紀	ヘレニズム化すすむ
前63	エルサレム陥落

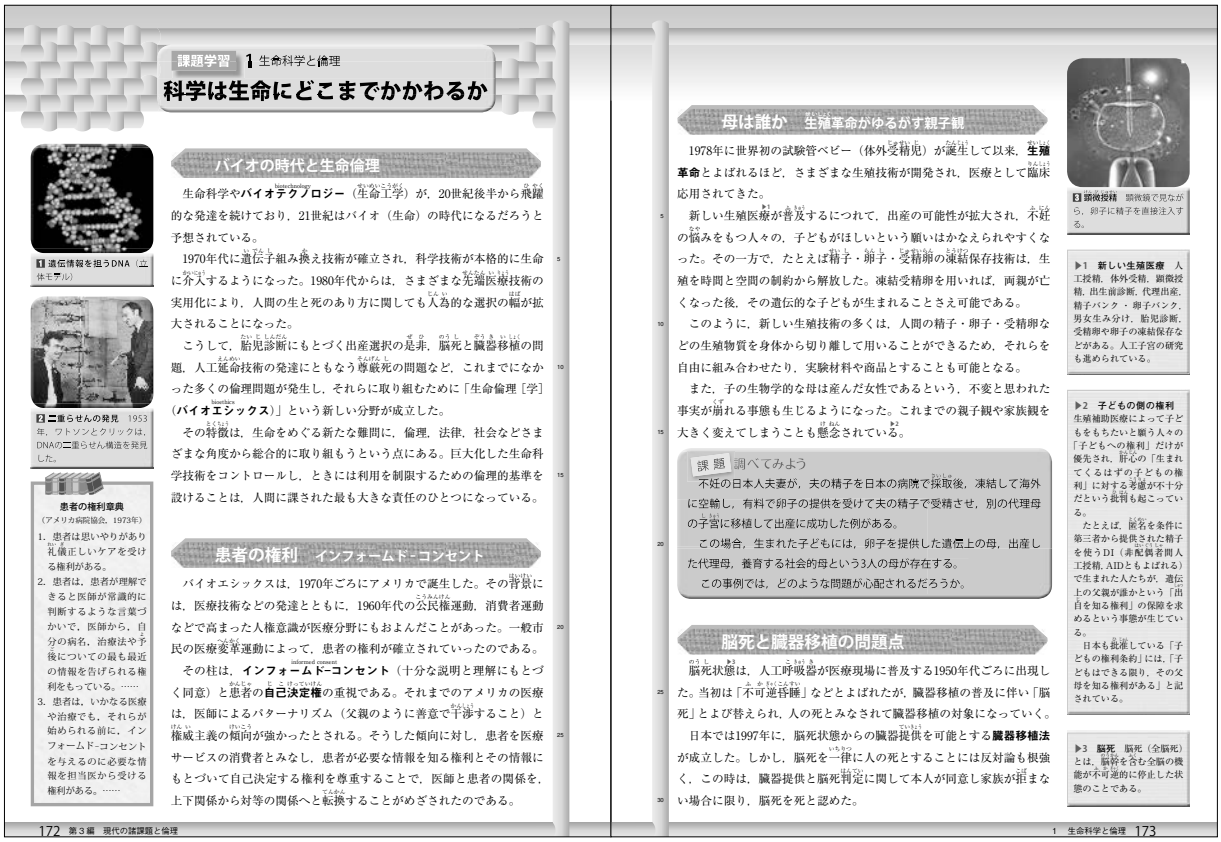
2『旧約聖書』関連地図

第1章　哲学と宗教の源流　35

▲ p.35　第２節　唯一神の宗教

④ 現代の諸課題を倫理的観点からとらえる

▶先人たちの思想や歴史を学んだことを土台として，現代社会における諸課題を倫理的な観点からとらえ直し，生徒自らがよりよい社会のあり方について考察し，その実現に向けて行動することを促すように配慮して記述した。



課題学習 1 生命科学と倫理

科学は生命にどこまでかかわるか

1 遺伝情報を担うDNA（立体モデル）

2 二重らせんの発見　1953年，ワトソンとクリックは，DNAの二重らせん構造を発見した。

患者の権利章典（アメリカ病院協会，1973年）
1. 患者は思いやりがあり礼儀正しいケアを受ける権利がある。
2. 患者は，患者が理解できると医師が常識的に判断するような言葉づかいで，医師から，自分の病名，治療法や予後についての最も最近の情報を告げられる権利をもっている。……
3. 患者は，いかなる医療や治療でも，それらが始められる前に，インフォームド-コンセントを与えるのに必要な情報を担当医から受ける権利がある。……

バイオの時代と生命倫理

生命科学や**バイオテクノロジー**（生命工学）が，20世紀後半から飛躍的な発達を続けており，21世紀はバイオ（生命）の時代になるだろうと予想されている。

1970年代に遺伝子組み換え技術が確立され，科学技術が本格的に生命に介入するようになった。1980年代からは，さまざまな先端医療技術の実用化により，人間の生と死のあり方に関しても人為的な選択の幅が拡大されることになった。

こうして，胎児診断にもとづく出産選択の是非，脳死と臓器移植の問題，人工延命技術の発達にともなう尊厳死の問題など，これまでになかった多くの倫理問題が発生し，それらに取り組むために「生命倫理［学］（**バイオエシックス**）」という新しい分野が成立した。

その特徴は，生命をめぐる新たな難問に，倫理，法律，社会などさまざまな角度から総合的に取り組もうという点にある。巨大化した生命科学技術をコントロールし，ときには利用を制限するための倫理的基準を設けることは，人間に課された最も大きな責任のひとつになっている。

患者の権利　インフォームド-コンセント

バイオエシックスは，1970年ごろにアメリカで誕生した。その背景には，医療技術などの発達とともに，1960年代の公民権運動，消費者運動などで高まった人権意識が医療分野にもおよんだことがあった。一般市民の医療変革運動によって，患者の権利が確立されていったのである。

その柱は，**インフォームド-コンセント**（十分な説明と理解にもとづく同意）と患者の**自己決定権**の重視である。それまでのアメリカの医療は，医師によるパターナリズム（父親のように善意で干渉すること）と権威主義の傾向が強かったとされる。そうした傾向に対し，患者を医療サービスの消費者とみなし，患者が必要な情報を知る権利とその情報にもとづいて自己決定する権利を尊重することで，医師と患者の関係を，上下関係から対等の関係へと転換することがめざされたのである。

172 第3編 現代の諸課題と倫理

母は誰か　生殖革命がゆるがす親子観

1978年に世界初の試験管ベビー（体外受精児）が誕生して以来，**生殖革命**とよばれるほど，さまざまな生殖技術が開発され，医療として臨床応用されてきた。

新しい生殖医療が普及するにつれて，出産の可能性が拡大され，不妊の悩みをもつ人々の，子どもがほしいという願いはかなえられやすくなった。その一方で，たとえば精子・卵子・受精卵の凍結保存技術は，生殖を時間と空間の制約から解放した。凍結受精卵を用いれば，両親が亡くなった後，その遺伝的な子どもが生まれることさえ可能である。

このように，新しい生殖技術の多くは，人間の精子・卵子・受精卵などの生殖物質を身体から切り離して用いることができるため，それらを自由に組み合わせたり，実験材料や商品とすることも可能となる。

また，子の生物学的な母は産んだ女性であるという，不変と思われた事実が崩れる事態も生じるようになった。これまでの親子観や家族観を大きく変えてしまうことも懸念されている。

課題 調べてみよう
不妊の日本人夫妻が，夫の精子を日本の病院で採取後，凍結して海外に空輸し，有料で卵子の提供を受けて夫の精子で受精させ，別の代理母の子宮に移植して出産に成功した例がある。
この場合，生まれた子どもには，卵子を提供した遺伝上の母，出産した代理母，養育する社会的母という3人の母が存在する。
この事例では，どのような問題が心配されるだろうか。

脳死と臓器移植の問題点

脳死状態は，人工呼吸器が医療現場に普及する1950年代ごろに出現した。当初は「不可逆昏睡」などとよばれたが，臓器移植の普及に伴い「脳死」とよび替えられ，人の死とみなされて臓器移植の対象になっていく。

日本では1997年に，脳死状態からの臓器提供を可能とする**臓器移植法**が成立した。しかし，脳死を一律に人の死とすることには反対論も根強く，この時は，臓器提供と脳死判定に関して本人が同意し家族が拒まない場合に限り，脳死を死と認めた。

3 顕微授精　顕微鏡で見ながら，卵子に精子を直接注入する。

▶1 新しい生殖医療　人工授精，体外受精，顕微授精，出生前診断，代理出産，精子バンク・卵子バンク，男女生み分け，胎児診断，受精卵や卵子の凍結保存などがある。人工子宮の研究も進められている。

▶2 子どもの側の権利　生殖補助医療によって子どもをもちたいと願う人々の「子どもへの権利」だけが優先され，肝心の「生まれてくるはずの子どもの権利」に対する考慮が不十分だという批判も起こっている。
たとえば，匿名を条件に第三者から提供された精子を使うDI（非配偶者間人工授精，AIDともよばれる）で生まれた人たちが，遺伝上の父親が誰かという「出自を知る権利」の保障を求めるという事態が生じている。
日本も批准している「子どもの権利条約」には，「子どもはできる限り，その父母を知る権利がある」と記されている。

▶3 脳死　脳死（全脳死）とは，脳幹を含む全脳の機能が不可逆的に停止した状態のことである。

1 生命科学と倫理 173

▲ pp.172~173 「科学は生命にどこまでかかわるか」

◎ テーマページ【Close up】一覧

1　臨床心理の知見から学ぶ　（14 ページ）
2　対話による哲学　（20 ページ）
3　ヨーロッパにおけるキリスト教教会と社会　（45 ページ）
4　無常観と日本の文化　（85 ページ）
5　精神と身体と「私」　（128 ページ）
6　現代の心理学　（167 ページ）
7　現代アメリカの政治哲学　（168 ページ）
8　生命への畏敬　（169 ページ）
9　人工知能の進化は何をもたらすか（170 ページ）

現代の心理学　close up 6

科学としての心理学

行動主義心理学の祖，アメリカの**ワトソン**は，臨床上の経験と観察に依拠した精神分析学や，自分自身の精神状態を観察する内観法に依拠していた20世紀初頭の心理学に異を唱えた。心理学が科学であるためには，客観的に観察可能な「行動」を対象とすべきと主張したのである。

ワトソンは，人間の行動とは刺激に対する反応であると定義し，たとえば，学習者にどのような刺激を与えれば，学習という反応がより円滑に進むのかを探ろうとした。

脳科学と認知心理学

ところが，人間は同じ刺激を受けても毎回同じ反応を示すわけではない。現実には，思考という過程を経ることによって，同じ刺激に対しても多種多様な行動を選び取っていくのである。

心理学の対象は，再度，行動に直接あらわれない心の中での過程にもどり，人間の思考を刺激に対する反応を制御する過程としてとらえる**認知心理学**が有力となりつつある。

その制御過程は，おもに脳を媒介として行われる。認知心理学は，知覚，記憶，思考といった従来の心理学の概念を，神経細胞からなる人間の脳というハードウェアがどのように情報を処理しているかという観点から探求しようとしていく。

この間，コンピュータや情報科学，神経科学や脳科学などがめざましく発展してきた。その成果との関わりの中で**認知科学**とよばれることもある。

▶2 よって現代の心理学では，実験・観察・調査などでデータを獲得し，そのデータを分析するための統計学的手法が重視されている。
▶3 ワトソンのこの考えは，「パブロフの犬」で有名な条件反射説に大きな影響を受けたものであった。
ロシアの生理学者パブロフは，犬にエサを与える際に常にベルを鳴らす実験を行った。すると犬は，エサが与えられなくても，ベルが鳴っただけで唾液を分泌するようになったという。
▶4 精神は身体から独立してあるわけではなく，身体も精神から独立してはあり得ないとする立場。
この立場は，身体に対して精神を上位におき，自由意志によって身体的欲望や感情をコントロールすることができるとするデカルトからカントにいたる伝統的な倫理学説を，批判することになる。

2 顔の認知と注視点　左図の○には，若い女性と認知した場合の注視点。右図の○には，年老いた女性と認知した場合の注視点。目や口に視線を集中させることで，相手の顔を認知していることがわかる。（『グラフィック心理学』より）

心理学の学際化

他方，感情・発達・社会性などの意味世界は，脳のはたらきからだけでは直接に説明することが困難である。人間の「こころ」とは，「こころ」の外側の，他者や「もの」の世界との関わりの中でしか理解されないものだからである。

この観点からは，物理学をモデルとする自然科学としての心理学にこだわるよりはむしろ，哲学・言語学・社会学などと交流をもつことが望まれている。

また，認知心理学者の中には，矛盾を抱えるデカルトの心身二元論とは違った理論の枠組みをもつスピノザの心身並行論に注目し，心と身体の関わりあいを考察しようという動きもあらわれている。この立場では，「合理的・理性的」な意志決定以前の身体症状をともなった情動や感情のはたらきに注目していくことになる。

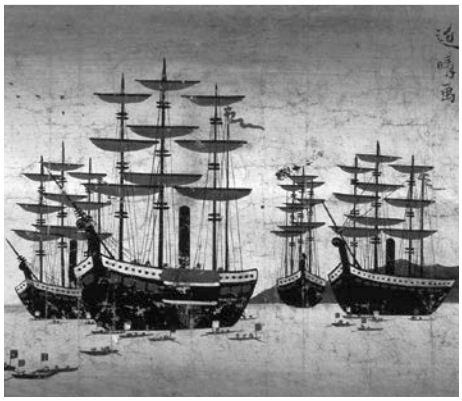
第3章 現代社会への道程 167

▶ p.167　現代の心理学（【close up 6】）

2 対照表

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当時数
プロローグ　人間とは何か		4～6ページ	0.5
第１編　現代に生きる自己の課題	（1）現代に生きる自己の課題		3
1 人生の中の青年期		8～10ページ	
2 自分をみつめる		11～13ページ	
3 社会を生きる		16～19ページ	
第２編　人間の生き方と社会のあり方	（2）人間としての在り方生き方		59
第１章　哲学と宗教の源流	ア 人間としての自覚		(18)
第１節　古代ギリシアの思想			5
1 万物の始源の探究		22～23ページ	
2 ソクラテス		24～26ページ	
3 プラトン		27～29ページ	
4 アリストテレス		30～33ページ	
5 ヘレニズムの思想		33～34ページ	
第２節　唯一神の宗教			4
1 イスラエル民族と一神教		35～37ページ	
2 イエスの思想とキリスト教		37～41ページ	
3 キリスト教の発展		41～44ページ	
4 イスラームの始まり		46～48ページ	
第３節　古代インド思想と仏教			4
1 古代インド思想の形成		49～51ページ	
2 仏陀と仏教		52～55ページ	
3 仏陀以後と大乗の発展		56～57ページ	
第４節　中国思想			5
1 中国思想の源流		58～59ページ	
2 儒教の始まり　孔子の思想		60～62ページ	
3 儒教の再構築　孟子・荀子・法家思想		63～65ページ	
4 儒学の展開　朱子学・陽明学		66～67ページ	
5 老荘思想		68～69ページ	
第２章　日本の思想の歩み	イ 国際社会に生きる日本人としての自覚		(18)
第１節　日本の自然と日本神話			2
1 日本の自然と風土		70～71ページ	
2 日本の神話と古代日本人の宗教観		72～74ページ	
3 神道の成立とその展開		75ページ	
第２節　仏教の受容と展開			4

▲ p.33　ヘレニズムの芸術
（ミロのヴィーナス，ルーブル美術館蔵）

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当時数
1 仏教の伝来と国家	 ▲ p.76　東大寺の大仏	76～77ページ	
2 平安時代の仏教		78～79ページ	
3 鎌倉時代の仏教		80～84ページ	
第３節　近世の道徳			4
1 儒教の受容と武士の道徳		87～89ページ	
2 朱子学への批判と儒学の新展開		90～91ページ	
3 国学		92ページ	
4 武士の道徳から庶民の道徳へ		93～95ページ	
第４節　幕末から近代国家への移行			2
1 西洋文化の受容と対応		96～98ページ	
2 啓蒙思想と民権思想	 ▲ p.98　ペリー艦隊（「武州潮田遠景の図」）	99～100ページ	
第５節　近代日本の模索			5
1 近代の受容		101～103ページ	
2 キリスト教と日本人		104～105ページ	
3 民族主義の台頭		105～106ページ	
4 近代日本の社会問題		107～108ページ	
5 日本の哲学		109～110ページ	
6 民衆からみた日本人のあり方		110～111ページ	
第６節　戦争の時代とその後の日本			1
1 戦争への道		112～113ページ	
2 戦後の日本思想		113ページ	
第３章　現代社会への道程	（３）現代と倫理		(23)
第１節　人間の尊厳	ア 現代に生きる人間の倫理		3
1 ルネサンス　人間の発見	 ▲ p.132　『百科全書』の扉絵	114～117ページ	
2 宗教改革　近代における信仰のあり方		118～119ページ	
3 モラリスト　有限性の自覚と寛容の精神		120～121ページ	
第２節　近代科学と人間			3
1 近代科学の成立		122～123ページ	
2 近代科学の方法		124～127ページ	
第３節　民主社会と幸福			4
1 人権思想の形成		129～133ページ	
2 社会の発展と幸福の追求		134～136ページ	
第４節　自己実現と社会参加			7
1 カントの思想		137～139ページ	
2 ヘーゲルの思想		140～142ページ	
3 社会主義の思想		143～144ページ	
4 実存主義の思想		145～150ページ	

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当時数
5 実証主義とプラグマティズム		151～152ページ	
第５節　新しい時代への扉			6
1 他者との間に生み出される世界		153～155ページ	
2 無意識と欲望		155～156ページ	
3 人間主体を取り巻く構造と権力		157～159ページ	
4 理性の立て直しと公共性の追求		160～162ページ	
5 フェミニズム		162～163ページ	
6 民主主義と公正の両立	▲ p.153　アウシュヴィッツ収容所	164～166ページ	
第３編　現代の諸課題と倫理	**イ 現代の諸課題と倫理**		**7**
1 生命科学と倫理		172～177ページ	
2 地球環境と倫理		178～183ページ	
3 情報社会における倫理		184～187ページ	
4 経済活動と倫理		188～191ページ	
5 家族・地域社会と倫理		192～195ページ	
6 文化・宗教の多様性と国際理解		196～199ページ	
7 国際平和と人類の福祉	▲ p.178　月からみた地球の出	200～203ページ	
エピローグ		204ページ	0.5
		計	**70**